

忽那七島に伝わる津波伝説について

氏 名 田中 成樹

所 属 株式会社 愛媛建設コンサルタント

T E L 089-947-1011

部 門 建設部門（河川、砂防及び海岸・海洋）

1 中島の津波伝説の驚き

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、津波によって未曾有の災害を各地にもたらした。あれから1年以上経過したが、未だに避難生活を余儀なくされる方がまだ多くおられる。一日も早い復興を心から願い、少しでも自分達にできる事を続けてまいりたいと強く感じている。国難ともいえるこの震災の報道において、大津波が鮮明な映像で頻繁に放送されたことはかつてなく、強い恐怖により被災地外の視聴者がストレス障害になる方もおられるほどの衝撃であった。これまでの私達は津波がどんなものかよく知らなかった。知っていても、それはニュースの映像であり、よその外国のことであり、ひとごとであった。今回の映像で、日本のどこにでもある身近な風景や建物が津波に呑みこまれるのを見たり、身内を亡くされた方の悲痛な叫びを聞くことによってようやく津波を身近に認識できたのではないだろうか。

さて、一般的に松山近辺の瀬戸内海沿岸は津波に縁がないと考えられている方も多いと思うが、実は、私の実家である中島周辺には、津波伝説が由利島、中島本島 饒（にょう）部落、興居島 鷺ヶ巣部落、古三津の4箇所も言い伝えられている。私は、有名な由利島の「由利千軒」伝説について、幼少の頃からよく聞かされていたが、当時から絵空事だと思いつい込み、現在に至るまで特に気にしたことはなかった。しかし、東日本大震災の5ヶ月後である昨年のお盆、私は故郷である中島に帰省したときにふと目に入った「おたるがした」という中島のむかし話を読んで、その表現のリアルさに驚いた。このむかし話について、みなさんに紹介したい。

中島のむかし話「おたるがした」

饒(によう)部落に「おたるがした」とよばれているところがあるんよ。むかし、むかしのある年のこと、おおきな地震があつてのう、島じゅうがぐらぐらとゆれだしたんよ。ふだんはおとなしい瀬戸の海も、このときばかりゃあ、白い大けな波が、齒をむきだしにしてのう、島をひとのみにする、らっせもない(とほうもない)、いきおいで、おしかけてきたんよ。としよりが、「こりゃあ、おおごとになるど。津波じゃ。津波がくると。はよ、みな、山ん中へにげんと、おおごとになるど。」と、海をみながら、おらんだんよ。「津波がくると。」「津波がくると。」という、おらび声に、村人は、なんも持たずに、山へにげこんだんよ。にげこんだとたんに、むくむくと海がもりあがって、小山のような波になってのう、浜から道、道から家、家から畑まで、いっぺんにのみこんでしまうたんよ。「おとうやん、おかあやん、おとろしいが。」「大けな声だすな。わしもおとろしいわい。」と、親も子も、だきおうたまま、まんじりともせんで(すこしもねむらないで)、津波がしずまるのを待ったんじゃ。「おとろしかつたのう。いのちだけは助かったわい。」「うちや畑は、どがいなつとろうか。」「はよ、いんでみようや。」村のもんは、こわごわ、山をおりたんよ。山をおりてみて、みな、「あつ」と、いうたまんま、立ちすくんだんじゃと。家も畑も、波にあらわれて、なんにもないんじゃけん。急に、たまげたように、「ありゃあ、あげなとこに、大けなたるがあるど。」と、子どもがおらんだんよ。子どもが指さしたほうを見たら、とてつもない大けなたるが、ごろんと山の根に、ころがつとるんじゃ。人の手でつくられたもんは、なに一つ残とらん。山すそにたったひとつだけ、大けなたるが、ころんところがつとるんよ。みんな、ぼかんと、そのたるを見とつたら、ひとりが、「わあつはつはつはつは、わつはつはつは。」と、わらいだしたんじゃ。ねきにおつた男が、「わりゃあ、なにが、そがいにおかしいんど。」と、ききょうると、わろうた男は、たるを指さして、らっせもない声で、ますます笑いころげとるんよ。「わあつはつはつはつは。」するとのう。まわりにいた男たちも、なんやら、急におかしなつてきてのう。「わあつはつは。」と、わらいだしたんよ。いつのまにか、みな、なみだをふきもつて、笑いだしたんじゃ。「のうよい、大津波で、わしら人間さまのつくつたもんは、なにひとつ残とらんが、あそこに、大けなたるがあるのう。こげん大けなたるは、人間さまがつくれるわけがない。どっかに住んどつた、とんまな大男が、大津波といっしょにやつてきよつて、わすれていったもんじゃろ。」「そがんいやあ、そうじゃのう。」「のうよい、わしゃあ、あのたるを見よつたら、なんやら生きる勇氣がわいてきたかい。とんまな大男のわすれもんかなんか知らんがのう、あの大津波にもこわれいで、あそこにある。あのたるに負けん家や畑を、もういっぺんつくつてみんかい。」と、村の年よりがいうたんじゃと。「おう、たるより、つよい家か。」「たるより、しゃんとした畑か。よつしゃ、つくろう。」というわけで、饒のひとは、みな力をあわせて、村づくりをはじめよつたんじゃ。つかれたらたるを見、こまつたときもたるを見てのう。なんかたるを見ると、勇氣や知恵がわいてきたんじゃと。ほして、なん年もかかつて、いまんような饒部落になったんじゃそうな。いつからか知らんがのう、村のもんはだれいうとなしに、あのたるのあつたとこを「おたるがした」とよぶようになったんじゃと。いまは、そこにのう、こんまい街灯がたてられとらい。

中島町教育委員会：中島のむかし話—伝説—、「おたるがした」, 1982, pp121-124

このむかし話の内容は、「すべてをのみつくした大津波のあとに大きなたるが残り、大男の間抜けな忘れ物を笑いあい、これを目標とすることで部落の和ができ、復興を遂げて現在の饒(によう)部落となった」ということで、よくあるたぐいの話である。しかし、この話の驚くべきは、津波の表現と描写である。まさに東日本大震災の津波映像そのもののリアルさであり、津波を経験した当事者でないこのような表現と描写はできないのではなからうか。ご存知の通り、瀬戸内海は穏やかな海で、津波があったことなど想像もつかない。おそらくこのむかし話を継承していったわがご先祖様達も半信半疑で後世に伝えていったのだらう。また、この話に驚くと同時に、同じ忽那諸島の津波伝説である「由利千軒ゆりこんだ」のむかし話を連想せずにはいられなかった。

2 瀬戸内のアトランティス伝説の島 由利島

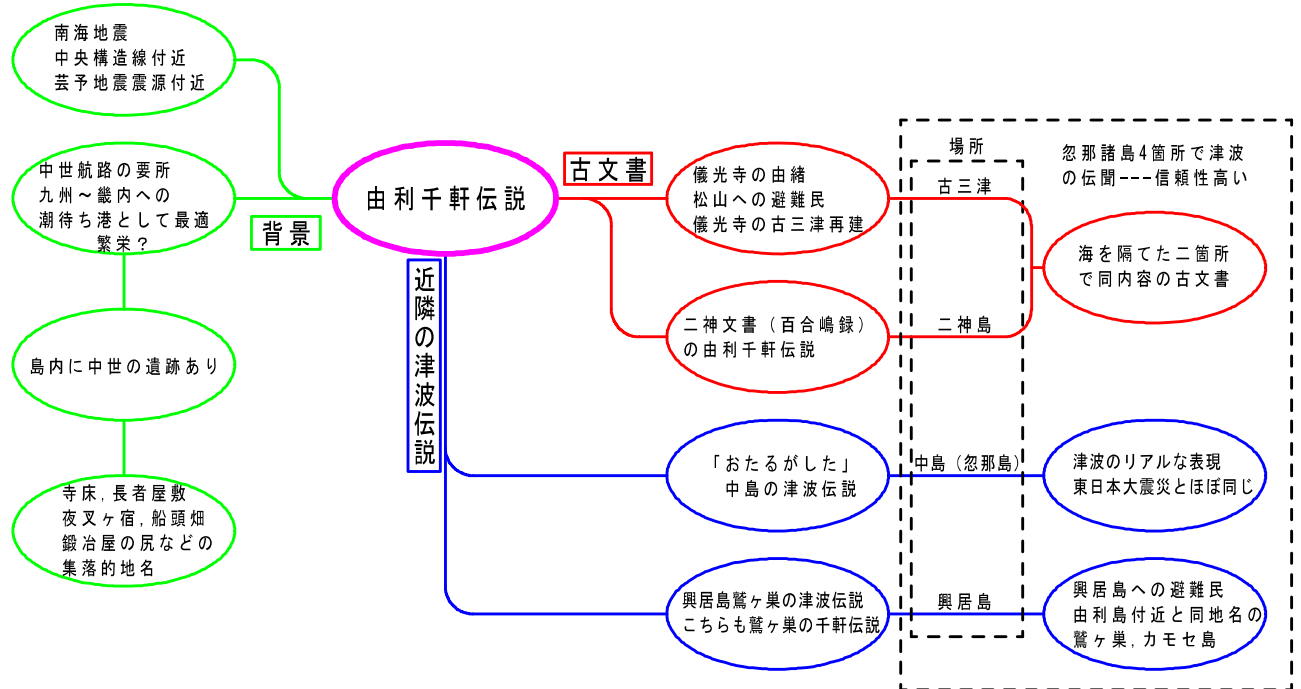
由利島は、忽那七島の一島に数えられることのある二神島の属島であり、かつては有人島であったが、昭和40年いわし漁の不漁により季節移住もなくなり無人島となった。近年では、もう14年前になるが日本テレビの「電波少年的無人島脱出」で舞台の島となっている。この島に伝わる「由利千軒ゆりこんだ」のはなしを聞いたのは私が小学生のときである。ちょうどその頃、テレビ「まんが日本昔ばなし」で同じ由利島の「お舟にもうし」という舟ゆうれいのはなしが放送され、島中がその話題でもちきりとなっていた。そのとき、だからか「由利千軒ゆりこんだ」の伝説を聞き、怪しいと思いながらも子供心に恐怖心を抱いたのであった。ここに由利島が地震、津波でひと晩で海に沈んでしまったという“瀬戸内のアトランティス伝説”を紹介する。

「由利千軒ゆりこんだ」

二神島の南にある由利島は、今は住む人もなく、出づくりの畑が少しあるばかりです。けれども、むかし、この島には千軒もの家々がたちならび、半農半漁の生活をして、平和に暮らしていたということです。この島は、今よりずっと大きくて、お寺もあれば、氏神様をまつるお宮もありました。日ざしも明るく、まるで、極楽のようにのどかな島であったそうです。いつごろのことかわかりませんが、ある時、このあたりに大地震がおこりました。この島が震源地だったのでしよう。すさまじい音とともに、千軒も家が地の底へのめりこみ、海水がどっとおしよせてきました。住んでいた人々は、ほとんど家といっしょに地底にうずもれたり、海へ流されたりしました。この大地震で島はみるかげもなくなり、わずか十分の一の面積が小さな二つの島になって残っただけだということです。今でも、寺床や長者屋敷とよばれる場所がありますが、ただ、おにゆりの花がひっそりと咲いているだけで、むかしのさかなようすをしのぶことはできません。波のしずかなときには、海の中に、むかしの井戸や石づみのあとが見えるとも、晴れた月夜には、ものかなしげな笛の音が、海の底から聞こえるともいわれています。そのとき、わずかに生きのこった数人の島人たちが、お寺のご本尊をまもった和尚さんを助けて、命からがらにげ、向かいがわの三津に住みついたといわれています。古三津にある儀光寺というお寺には、由利島の大地震のときに助かった人々が、おうつしたご本尊を、おまつりしてあることを、はっきりと書いた文書があるということです。大地震のために、ひと晩で“ゆり”こんだ島……そのときから、この島を由利島とよぶようになったそうです。

3 「由利千軒伝説」の信頼度について

さきに紹介した「由利千軒伝説」であるが、「背景」「古文書」「近隣の津波伝説」についてひとつずつ検証していくと伝説の信頼度が高まってくる。一見して理解していただけるように、由利千軒伝説の関係図を図-2に示した。このように、地震・津波や島民が実在していた「背景」や海を隔てた4つの地域で、しかも情報が少ない時代に津波の情報が言い伝えられていることを考慮すると実際に津波の事象があったと考えるのが普通であろう。図-2について(1)背景、(2)古文書、(3)近隣の津波伝説に分けて解説する。



※このほか、ネットの情報では、「海底に古井戸、遺跡が発見された」等の情報がありますが、公式文書としては存在しないため無視しております。

図-2 由利千軒伝説の関係図

(1) 背景

まず、「由利千軒」の背景として、由利島の位置が南海地震、中央構造線、芸予地震等の影響域にあり(図-3、表-1)、過去の地震履歴からも近隣で大きな地震、津波が発生する素因は十分である。また、図-4に示す通り、由利島は九州から畿内への重要航路沿いに位置し、周囲の島も離れているため潮待ち港として利用されていた言い伝えがある。当時の航路は現在の高速道路に該当するいわば海のハイウェイである。前述した「お舟にもうし」は大阪へ行く舟に由利島の女ゆうれいがのせてもらう、潮待ち港ならではの伝説であり、事実であってもおかしくはない。さらに図-5および中島町誌より中世の遺跡が2箇所あり、寺床、長者屋敷、夜叉ヶ宿、船頭畑、鍛冶屋の尻などの集落を想像させる地名がたくさん残っていることから、千軒ではないにしても百軒程度の集落が構成されていたのではないだろうか。このような背景から、「由利千軒」伝説の事実性、妥当性が十分考えられる。

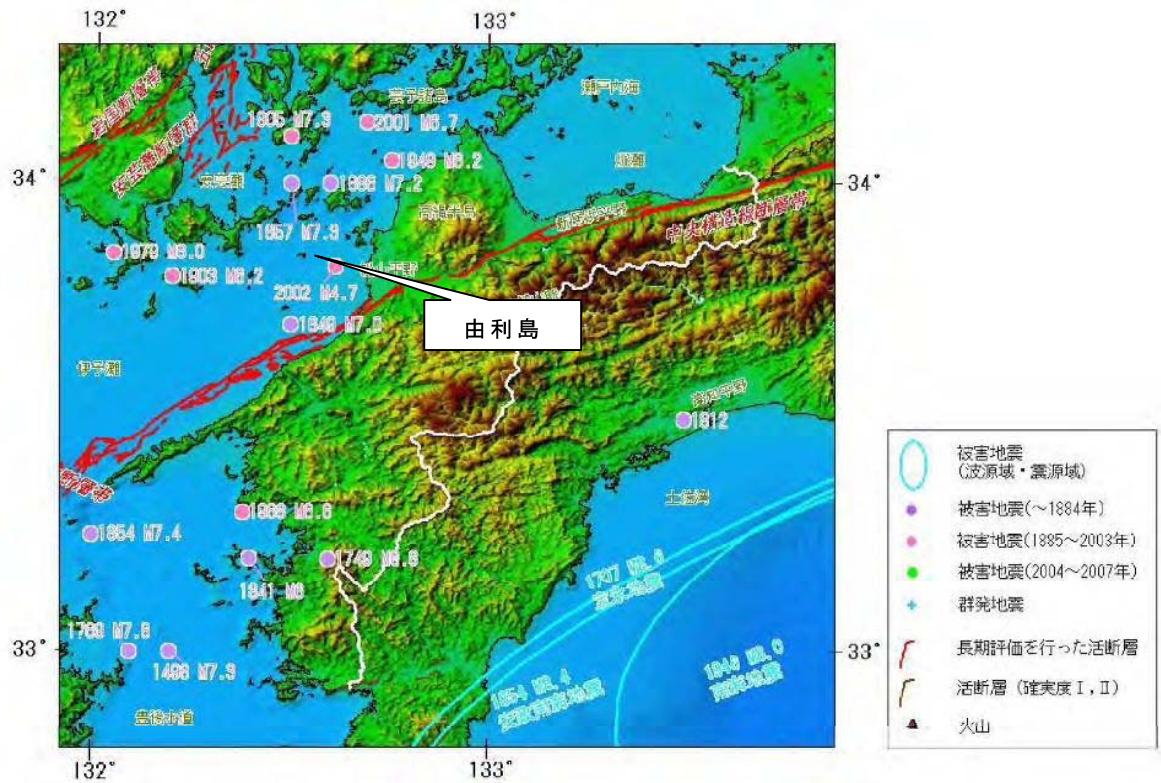


図-3 愛媛県とその周辺の主な被害地震

地震調査研究推進本部事務局（文部科学省研究開発局地震・防災研究課）ホームページより

表-1 愛媛県周辺の海溝で起こる地震

地震		マグニチュード	地震発生確率 (30年以内)
南海トラフ	南海地震	8.4 前後	60% 程度
日向灘および 南西諸島海溝 周辺	安芸灘～伊予灘～豊後水道	6.7～7.4	40% 程度
	日向灘プレート間地震	7.6 前後	10% 程度
	日向灘プレート間のひとまわり小さいプレート間地震	7.1 前後	70%～80%

地震調査研究推進本部事務局（文部科学省研究開発局地震・防災研究課）ホームページより

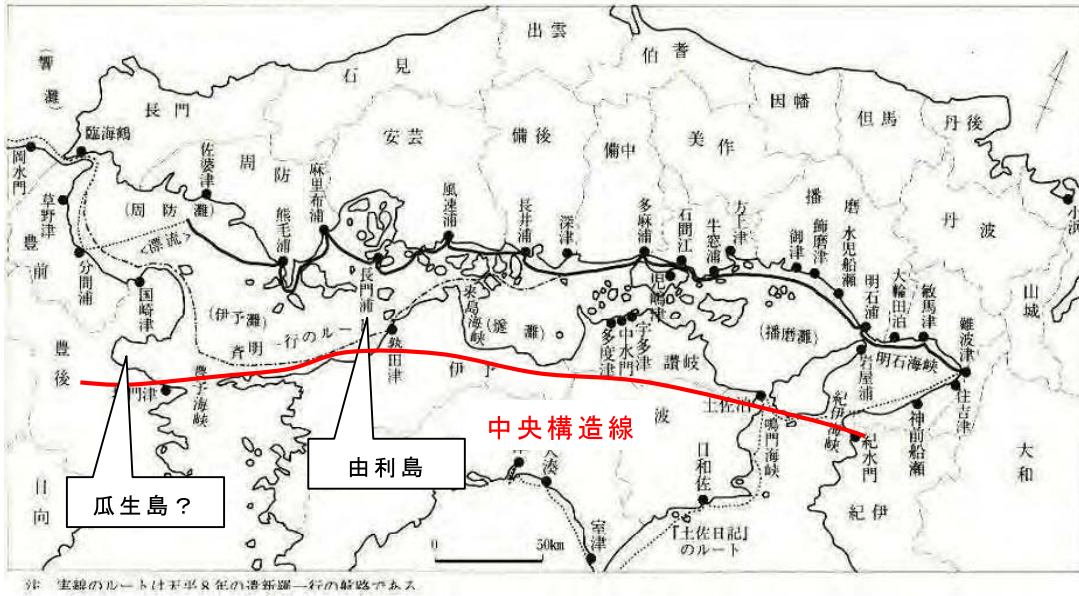


図-4 天平8年(736)の遣新羅使節の航路(ほぼ儀光寺建立時)

松原弘宣: 古代国家と瀬戸内海交通, 2004 (中央構造線は筆者記入)

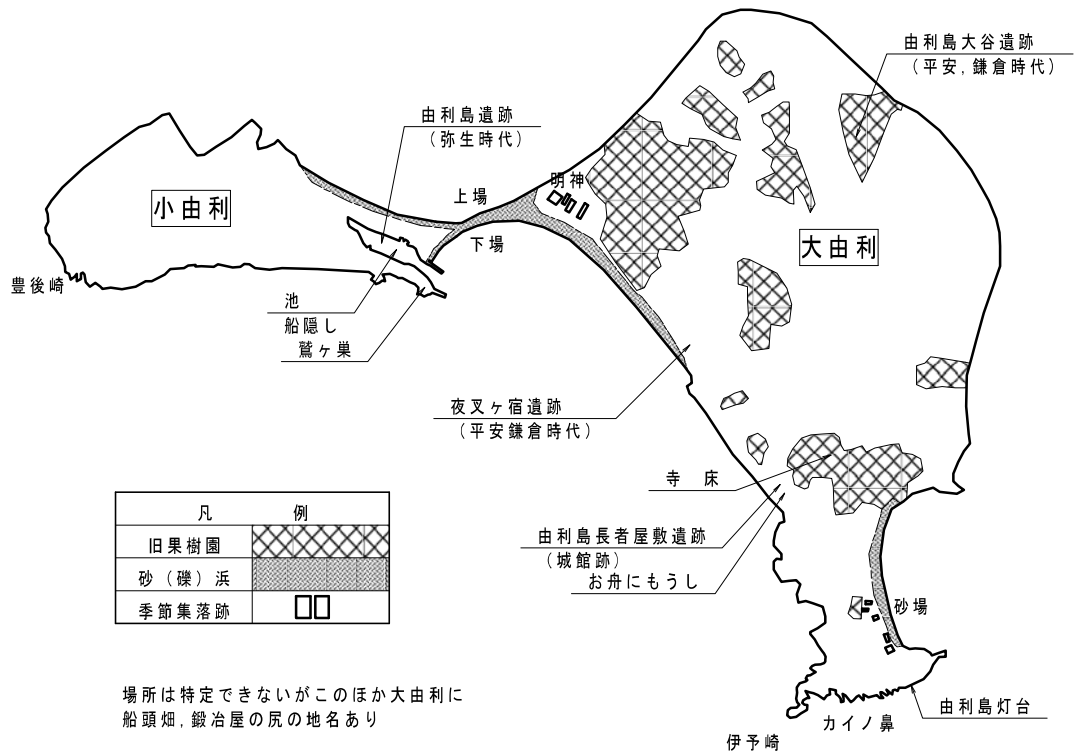


図-5 由利島詳細図(国土地理院空中写真をトレース)

(2) 古文書

「由利千軒伝説」についての古文書は松山市古三津と二神島に残されている。松山市古三津の儀光寺の由緒には、儀光寺はもともと由利島にあったが、弘安年間（1278-1287）地震津波によって、島民とともに島を離れ、古三津に寺を再建したとある。当時お寺を再建するには多くの浄財が必要と思われるが、港町として繁栄していたと仮定すると再建もそう難しいものではなかったものと推察できる。また、江戸時代（1778年）にまとめられた二神島の二神文書の百合嶋録に「由利千軒」「地震」の伝聞の記述がある。このことは、海を隔てた古三津と二神の別々の2箇所では同じ内容が書かれているということであり、「由利千軒」伝説の信頼度を向上させる根拠のひとつであると考えられる。

松山市古三津 儀光寺の由緒

天平年間(729-748)伊予灘の孤島、由利島に儀光上人が十一面観音像を背負い来たって一草庵を結ぶ。弘安年間(1278-1287)地震津波の天災に遭遇、島民は観音様のお導きにより島を離れ古三津に寺を再建し人々は苜屋(神田町、住吉町)新苜屋(高浜)に住んだ。

百合嶋録(二神家文書) 安永7年(1778)

俗ニ右嶋今之大山の方ヲ小百合ト言、小山の方ヲ大百合ト言、又由利千軒トテ往古ハ人家千軒有之候之由、至今ニテ申伝也事地震ニ崩タルヨシ
(俗に右の大きい山の方を小百合といい、小山の方を大百合といい、また昔「由利千軒」といって人家が千軒あったようだが、今に至るまで地震で崩れたと伝え聞く。)

大百合と小百合が逆？

(3) 近隣の津波伝説

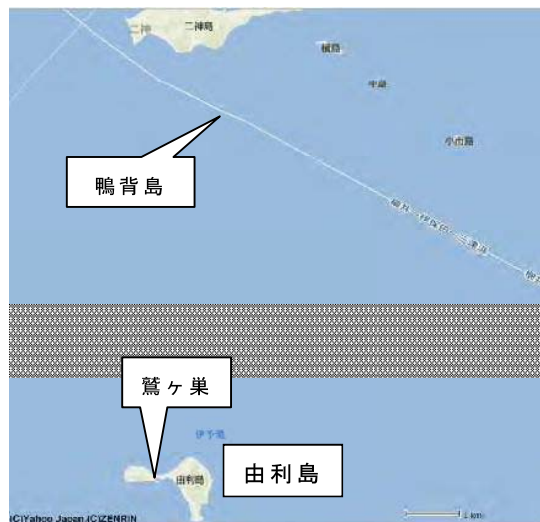
近隣の津波伝説は、前述した「おたるがした」の中島(当時 忽那島)と興居島にある。「おたるがした」の表現はリアルで、東日本大震災の津波映像そのものであり、おそらく事実であろうと考えられる。興居島の鷺ヶ巣には、ほとんど「由利千軒」と同じ「鷺ヶ巣千軒」伝説が伝わっていて、鷺ヶ巣も津波によって集落、田畑が流されたそうである。実は、由利島にも鷺ヶ巣、近隣にカモセ島の地名があり、興居島では由利島の避難民がここに住んで同じ地名を付し、津波の記憶も持ち込んだと考えられている。この鷺ヶ巣の伝説は由利島の「由利千軒」が「鷺ヶ巣千軒」に変化した可能性があるものの、津波がどちらかでおこっていなければ作れないはなしであり、津波の事実があったのはほぼ間違いないのであろう。当時は護岸もなく白砂青松で守られただけの遠浅の田畑であったはずで、1~2mの津波でも地盤沈下と津波で複合的に被災すれば集落が沈没することもあっておかしくはない。

このように古文書と津波伝説をあわせると海を隔てた別々の4箇所で大震災・津波が伝聞されていることになる。これらを背景を含めて総合的に考慮すると「由利千軒」伝説の信頼度は高いと考えるのが普通ではないだろうか。

興居島鷺ヶ巣の地名由来

昔は今より沖合までが陸地で、干潮時には釣島まで歩いて渡れたという。耕地も広く、家も千軒有ったというが、ある年に津波によって田畑が流されたという。弘安期(13世紀末)の地震による津波で、付近の由利島で集落が滅んだ事象があり、由利島にも鷺ヶ巣の地名が有るため、由利島の避難民がここに住んで同じ地名を付し、また津波の記憶も持ち込んだとも考えられる。

興居島愛好会ホームページより



(参考)

同様のはなしとして、大分の別府湾にあったといわれる瓜生島の地震による沈没伝説がある。瓜生島も由利島と同様に中央構造線沿いの位置にあり、詳細な古地図が残っている。

「瓜生島」

伝説や昔話をもとにすると、瓜生島は大分市から400-500メートル沖の別府湾内にあり、島の周囲は約12キロメートル、人口5千人ほどと推定されている。伝承によれば、島にあった恵美須像の顔を不心得者が赤く塗ったため、祟りで島が沈んだとされる。瓜生島という名称が最初に使われたと言われるのが、1699年の戸倉貞則『豊府聞書』（現存せず）である。同書およびその写本または異本とされる『豊府紀聞』によれば、瓜生島は1596年9月4日（文禄5年閏7月12日）の地震（慶長豊後地震）によって沈んだとされている^[1]。この地震については、ルイス・フロイスが、「九州にある太閤の海港が地震によって被害を受けた」と言及している。この地震は実際に起きたものであることが現在までの研究で判明しており、震源地は別府湾南東部で、マグニチュード7.0程度の地震が起きたものと推測されている^[1]。

Wikipediaより

4 まとめ

由利島は孤島であり、私は中島出身ながら島に上陸したことはないし、郷土史の専門家でもない。この投稿は、文献調査のみで、自分の思うままの考えを述べさせて頂いた。このため、根拠に乏しい面もあり、「由利千軒」伝説が事実ではないことも否定できない。

例えば、否定的な考えとしては、

- ・土佐の津波経験者が島に住み着いて津波を伝聞したのではないか
- ・瓜生島の沈没伝説を由利島に置き換えて流布したのではないか
- ・好漁場のため、人を寄せ付けないように不気味な伝説をつくったのではないか

などが思い浮かぶ。「由利千軒」伝説が事実としても、きわめて稀にしか起こらない現象であることは間違いなく、過大評価をする必要はない。しかし、伝説だからといって「津波はこない」「来てもたいしたことはない」と過小評価するのも無神経すぎるだろう。昭和 21 年の昭和南海地震では対岸の松前、郡中の海岸部が強震して甚大な被害を及ぼし、中島大浦港では液状化現象と思われる地盤沈下で港湾施設が浸水している。また、愛媛県周辺で 30 年以内の地震発生確率は、表-1 の通り、津波が起こり得る海溝型地震のものが非常に高く、留意しなければならない。

この世の中、地震がある限り、山に住もうと思えば土砂災害が心配で、平地に住もうと思えば津波、液状化が気になる。田舎に住めば集落孤立の心配があり、都会に住めば人工物の倒壊、落下が気にかかる。この世に安住の地などはない。ただ、過去の教訓を守ることで命が救えた事例がある。東日本大震災を経験した宮古市、大船渡市では明治三陸津波の際に「これより下に家を建てるな」という碑を立て集落ごと高台に移転したため、津波被害を免れたらしい。

「災害は忘れたころにやってくる」というように、災害の当事者でないと人間の記憶は風化する。また 50 年もすれば東日本大震災も風化するかもしれない。わが中島町に伝わる津波伝説はそのような正常性バイアスを戒める意味を持つのではないか。中島出身の私にとってはこれらの津波伝説は、歴史ロマンたっぷりのノンフィクションであってほしい。しかし、「事実か空想か」そんな議論はどうでもよい。子供でもわかることばで伝える「世の中何があるかわからんで、安気にかまえずにふだんから災害に気をつけよ。」というご先祖様からのメッセージのような気がするのだ。

以上

参考文献および引用ホームページ

- | | | |
|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 「中島のむかし話－伝説－」 | 昭和 57 年 | 中島町教育委員会 |
| 「中島町誌」 | 昭和 43 年 | 中島町 |
| 「忽那諸島界隈はええとこぞなもし」 | 平成 19 年 | 山野 芳幸 |
| 「古代国家と瀬戸内海交通」 | 平成 16 年 | 松原 弘宣 |
| 「二神系譜研究会ホームページ」 | http://rootsfutagami.org/index.html | |
| 「興居島愛好会ホームページ」 | http://gogosima-ikou.nsf.jp/ | |
| 「地震調査研究推進本部事務局ホームページ」 | http://www.jishin.go.jp/main/index.html | |